



たてやま

おのがんまつち

南総祭礼研究会

2014.3 No.18



籠山市北条地区 六軒町



六軒町の中心にあるJR館山駅

- 製作年：山車本体・明治二十年代前半 彫刻：明治三十年
- 大工：石井熊次郎
- 彫刻：後藤喜三郎 橋義信
- 上幕：松に鷹
- 大幕：竜虎
- 泥幕：波に千鳥
- 提灯：諏訪模紋
- 半纏：駒六



近藤 画

後藤喜三郎橋義信の
代表的な大作の彫刻

地域の紹介

六軒町の成り立ちは、江戸時代初期に和歌山県より移住した人々の中の六軒の人々が房州の漁業開拓者として土着したと言われています。その六軒とは、伝右衛門(デーミドン)・由右衛門(ヨシミドン)・金助(キンスケドン)・勘平(カンペイドン)・惣助(ソウスケドン)・源七(ゲンシチドン)と呼ばれ、「ドン」とは「殿」のことで、この六軒にだけ用いられた呼び名でした。大正八年鉄道が開通、安房北条駅が六軒町に建てられたことにより、たくさんのお店が駅の近くに移動し、以来六軒町は大変な賑わいの時代を迎えます。そして北条はもとより安房の中心地として発展していくこととなります。

現在の六軒町は八つの町内会からなる千八百五世帯という大世帯。時代とともに人の流れや街の様相は変わってきましたが、六軒町は商業、観光などあらゆる面で館山の中心地として存在しています。

自慢の山車

「六軒町の山車」といえば何といっても「黄金の鳳凰」。その大きさと堂々たる風格、金箔で染められた美しい姿は見事です。鳳凰が止まっているのは囃子座の柱から伸びた桐の木で、山車全体の大きな意匠が迫力を増しています。

製作は明治二十年代前半に、地元大工の三木屋二代目・吉野伝蔵師によるものと伝えられ、彫刻は館山国分の彫工・後藤喜三郎橋義信の手によるもので、明治三十年頃の完成といわれています。飛竜や孝子物語、

上高欄の擬宝珠の巻龍など圧倒的な存在感を感じさせる山車に仕上がっています。

形は「江戸型山車」で、山車後部からは「誠忠の公」と呼ばれた鎌倉時代の武将「楠木正成公」・桜井宿子別れの場「場面」の人物をせり出します。先人たちの篤い崇敬の念により支えられ、昔のままの綺羅びやかさと繊細さ、さらに力強さをも合わせ持つ姿を守り続けてきたことが、六軒町の誇りです。

